

1. 読書による省察(p403-410)

・ 読むことと書くことの問題

読書についての忠告・・・古代に広く行われていた実践にもとづく

大切にされていた原則:

あまり著作や作品を読まないこと、作品を読むとしてもあまり多くの文章を読まないこと

↓そのための実践として、2つ。

①要約という実践

⇒重要かつ十分なものとみなされている節を選んで読むこと

⇒作品の要約(知るだけでは十分ではなく、同化し、それについて語る主体となるための実践)

②詞華集という実践

⇒ある主題についてあるいは一連の主題についてさまざまな作家の命題や省察を集める

③ある作家の印象を取り集めて文通相手に送る実践

⇒「この文章は重要だ、この文章は面白い。だから君に送ろう。」

哲学的な読書の対象や目的は、ある作家の作品を知ることではありません。その機能は、理論を深く理解することでさえありません。重要なことは一いづれにせよ主要な目的であったことは一読書によって省察の機会を与えることなのです。(pp.404,18-10)

・ 省察という概念

メディターティオン(ラテン語)・・・ギリシア語のメレーの翻訳、動詞形はメレターン

メレーやメレターン・・・19世紀や20世紀の人間が「省察」として考える意味をまったく持たない。

メレターン・・・訓練のこと≡ギムナゼイン(熟考する・訓練する)

↓ちがいは??

ギムナゼイン・・・「実際の」試練、事柄それ自体に立ち向かう方法のこと

メレターン・・・思考訓練、「頭の中での」訓練

現代の省察・・・何かについて特別の集中力で思考しようと試みることに、ただしその意味を深めることはしないこと

⇕

メレターン・・・自分のものにする訓練、思考によって自分のものにする訓練

(NOT:ある文章が与えられたときにそれが何を意味するかを知ろうとする努力)

メディターディオ・・・思考を自分のものにする、それを深く確信すること

→必要や機会が生じたらすぐ繰り返して言うことができるように深く確信すること

すなわち、真実の事柄から出発して、真実を思考する主体となり、真実を思考する主体から、しかるべき方法で行動する主体になることなのです。(pp.405,12-13)

- ・ 同一化の訓練としてのメディターディオ
 メディターディオ・事柄それ自体について思考することではなく、思考している事柄の訓練をすること
 例：死についての省察
 死につつある人、これから死ぬ人、死の前の数日間を過ごしている人の状況に思考によって身を置く
 (NOT:主体が対象に働きかけること、自分の思考の可能な対象に働きかけること)
 ⇒思考が主体自身に実際に働きかけること
 ⇒思考によって、死につつある人あるいは今にも死のうとしている人になる、ということ
- ・ デカルトの『省察』
 思考の主体への働きかけ
 疑いえぬものを探求する者の状況に身を置く
 主体が思考によってある状況に身を置く訓練
 ⇒哲学的な読書が持つべき省察的な機能
- ・ 哲学的な読書
 主体が思考によって虚構の状況に身を置き、そこで自分を試練にかけること、こうした省察的な機能のゆえにこそ、哲学的な読書は作者に無関心であり、文や格言が置かれたコンテキストにも無関心
- ・ 読書から得られる効果
 作者が言いたかったことを理解することではなく、実際に自分のものとなるような真の命題を身に装備すること
 命題が命令や真実の言説としてだけではなく、行動原則としての価値を持つ
- ・ 読むことと書くこと
 読むことは書くことと直接に結びついている
 1～2世紀における書くこと＝自己訓練
 読む→書くことによって延長・強化
 セネカの指摘：読書は諸言説を集める、それをコルプスにしなければならない！
 ①読むことをたえず続けていると自分の力を衰弱させてしまうことになる
 ②書いてばかりいると力を減少させ、弱めさせてしまう。
 ③読書によって集めたものを、文章の表現によって作品(コルプス)化しなければならない
 エピクテトスの指摘：省察(メレターン)し、書き(グラフィン)、訓練する(ギュムナゼイン)ことが必要！
- ・ 書くこと
 ①自分自身のための使用
 思考している事柄をみずからに同化する。事柄が魂・身体に根付き、習慣のようなもの、肉体的な潜在性になることを助ける
 書いたあとに読み直すこと・・・習慣として勧められていた
 読み書きの訓練＝人が手元にもっている真理やロゴスを自分のものにするための肉体的訓練
 ②他人のための使用
 読書や会話の講義の時に書かなくてはならない覚え書き＝ヒュポムネーマタ
 自分のためにも役立ちますが他人のためにも役立つ
 【余談】M先生がまとめてくださっている、まなキキオンライン講読会の振り返りも「ヒュポムネーマタ」ですね！
 文通・当時の社会現象、政界について知らせるのではなく自分自身について知らせること

徳や善の勝った者が他人に忠告を与える&忠告を与える者にも与える真理を記憶することを可能にする

他人と文通するとき＝個人的に訓練をしている

例：ルキリウス宛のセネカの書簡

息子を亡くしたマルツルス宛の書簡を書き写したもの

①マルツルスに役立つ

②ルキリウスの役に立つ(いつか不幸が起きたときの訓練として)

③セネカ自身にも役立つ(知っていることを蘇らせる訓練として)

↓こうして行われていた文通が、16世紀ヨーロッパになると・・・

2. キリスト教的靈性における語りの技法(pp.410-416)

- ・ 16世紀の覚え書き・文通

内面の日記、人生の日記、文通など⇒自伝が中心的な位置を占めるようになる

16世紀に至るまでの過程にあったもの・・・キリスト教

例：聖アウグスティヌスの『告白』

⇒「どのように真理を語る主体になるのか」ではなく、「どのように自分について審理を語ることができるか」という目的が、主体の真理への関係を支配するような体制へ移行する。

- ・ キリスト教における語りの技法

師の側の語る技法：聖書のエクリチュール(書き言葉)によって秩序づけられている

師がもつ機能・・・教育機能、真理を教える機能、命令的処方の活動、靈的指導者の機能、悔悛の師・聴罪司祭の機能

導かれる者・・・なにか言うべきことを持っている。言うべきことを持ち、真理を語る必要性。

⇒彼自身の真理、自己についての真実を語ることが救いのために必要な手続き

⇒自己について語ることは共同体に帰属するための必要要素

↓古代ギリシアやヘレニズムやローマにはまったくみられない！

- ・ 古代ギリシア・ヘレニズム・ローマにおける語り

師の言説によって真理に導かれる者は、自己についての真理を語る必要はありません。真理を語る必要すらありません。真理を語る必要がないのですから、語る必要もないのです。黙っていなければならず、それだけで十分なのです。教え導かれる者が、西欧の歴史の中で語る権利を持ったのは、自分自身について＜真実を語る＞という義務、すなわち告白の義務によってなのです。

(pp.412,115-19)

- ・ 告白

古代ギリシア・ヘレニズム・ローマにも、告白の手続きはあった

告白の手続き・・・忠告を求めようとする人は自分自身について語らなければならない

友人に対して率直にふるまい、胸中を忌憚なく語らなければならない

⇒友人に素直だったり、指導者に身をゆだねたり、自分がどんな状態にあるかを語る義務は、道具的な義務であり操作媒体となるようなものではなかった。

⇒自分に対して真実を語ることはあっても、「自分自身についての真実」を語ることは必要不可欠ではない

- ・ ソクラテスの問答やストア派犬儒派がしていること

知っていると思っていることを知っていないと示してやること

主体は、真実の言説の主体化の過程や真実を語る能力がどれだけ進んでいるか意識せざるを得なくなる
⇒語る必要はなく、語ることはあってもたんに師の言説がどのように持続しどのように展開しているか示すだけ(＝導かれる者の言説には自律性はなく、固有の機能はない)

- ・ 師の言説

師は、パレーシアの原理に従う言説を発する必要性

※パレーシア・・・すべてを語ること、心を開くこと、言葉や言語を開始すること、言葉の自由

※ラテン語で、リーベルタースと訳される。すべての語る主体に要求される道徳的資質のこと。

なぜ語るのか・・・必要であり、有用であり、真だから

- ・ エピクテトスの言葉を聞いた聴講生アリアノスの文章

「この男が話していたときに私が聞いたすべてのことを、わたしは努力して、書き留めた・・・まさにその語で書き取ることによって、私はそれをヒュポムネーマタのかたちで、私のために、将来のために保存しようとしたのだ」

→この引用は、フーコーが話してきたことがそのまま出てきている。

→語られた記録を自分自身のため、将来のために、すなわちパラスケウエー(備え)を用意するために作り上げ、公表する。

→エピクテトスその人の「思想と、言葉の自由」を表現・公表

3. 次回の講義で扱う内容(pp.416-417)

- ・ 師が語る言説・・・人工的で偽装された言説、弁論術の法則に従う言説、弟子の魂に悲壮感を引き起こすことだけを目指すような言説であってはならない(＝誘惑的な言説であってはならない)
⇒弟子の主体性がみずからのものにできるような言説でなくてはならない
- ・ 師が身に着けている規則・・・真理の言説を表現する規則＝パレーシアでありリーベルタース
↓次回は・・・
- ・ 真理の言説の諸規則

4. H松のコメント

- ・ (雑駁な感想)とある大学の大人数授業で、「テストでは、A4 一枚裏表に要点を書き写したカンニングペーパーの持ち込みを許可します」とアナウンスしたところ、「テストでカンニングペーパーを許可したら、毎回必ず授業に出席している人と一切授業に来なかった人との努力の差が成績に現れなくなるし、ズルいと思います」というクレームがつけました。「カンニングペーパーをまとめる過程が学びになるんじゃない？その学びをあなたはズルいと言うんですか？」と思わず返してしまった(アカハラとか言われるかも～と内心びくびくしながら返した)のですが、要約が語る主体になるための実践行為ということであれば、あながち、私のアカハラすれすれの言葉はセーフだったのかなと思いました。
- ・ 「また、こうした省察的な機能によって、読書から得られる効果も説明されます。それは作者が言いたかったことを理解することではなく、実際に自分のものとなるような真の命題を身に装備することです(pp.406,119-20)」という文章を読んで、小学校の国語のテストってなんだったんだろう？と思いました。「このときの作者は、どんな気持ちでしたか」という設問が毎回、決まったように最終問題に出てきて、子どもながらに「それは作者に聞いてみないと分かんない」と書いたら駄目だからとりあえず、「つらいきもち」って書いておこうと空気読んでいた記憶も思い出されます。人生の備えになるよう省察的に読むことを狙いとする哲学的な読書をさせる国語とは程遠いテスト内容だったと言えるのではないのでしょうか。